

20世紀初頭の日本・カリフォルニア「写真花嫁」修業

—— 日本人移民女性のジェンダーとクラスの形成 ——

田 中 景

はじめに

「写真結婚」は、一世の在米日本人移民の間で普及した結婚習慣で、アメリカの日本人男性と日本の女性が、仲介者の紹介を経て、お互いの写真、履歴書、手紙を交換し、結婚を決めるという、一種の見合い結婚であった。20世紀初頭のカリフォルニアの日本人社会の指導者たちは、白人アメリカ社会に高揚しつつある排日運動は、日本人労働者の出稼ぎ根性と風紀の乱れた生活のためであるとして、日本人移民に結婚によるアメリカ定住を奨励し、日本人コミュニティの風紀改善を唱導していた。この「写真花嫁」の呼び寄せは、在米日本人労働者が家庭を築くための、最も現実的で手ごろな手段であった。「写真結婚」が最も普及したと言われる、紳士協約が締結された1908年頃から、「写真花嫁」呼び寄せが在米日本人社会及び日本政府により廃止された1920年までの期間に、7,000人から10,000人の「写真花嫁」が、アメリカに入国したと推定されている。

この「写真結婚」は、当時の日本の結婚慣習の枠を、観念的には逸脱したものでなかったが、実際には当初から問題が多かった。花嫁がアメリカに到着するまで、「写真結婚」の当事者同士が、お互いに顔を合わせたことが一度もなかったということは珍しくなかったと言われている。また中には、花嫁欲しさのあまり、本人とは似ても似つかぬ写真や、現実の生活とは異なる美化した内容の手紙を、花嫁に送った日本人男性もあった。そのため、想像

からはかけ離れた現実の夫に幻滅し、また過酷な労働生活に耐え切れずに、家出をしたり他の男性と駆け落ちした移民女性の例も数多くあった¹⁾。

世紀転換期にアメリカに渡った、日本人の移民史研究において、「写真結婚」は、日本人移民の典型的な女性呼び寄せ手段として、また、「写真花嫁」は渡米日本人女性の代表的な表象として、必ずと言っていいほど言及されている。しかし、日本人移民の「写真結婚」や、「写真花嫁」そのものを正面から据え、史的分析を加えた研究は少ない²⁾。そんな状況の中で、近年のオーラル・ヒストリーの手法を用いた研究は、個々の「写真花嫁」たちの、多様な渡米経験や生活誌を明らかにしつつある³⁾。

また、「写真結婚」や「写真花嫁」の日本人移民史における位置づけは、特に在米日本人コミュニティにおける、日本人移民同士の関係性に着目することにより、考察される。その代表的な例として、「写真花嫁」たちと日本人キリスト教団体との関わり合いが、挙げられる。日本人移民の間で「写真結婚」が普及し、日本人女性の呼び寄せが盛んに行われた結果、在米日本人コミュニティにおいて、健全な男女の関係性や家庭生活のあり方を確立する必要性が増していった。そして、その指導的な役割を果たしたのは、日本人キリスト教諸団体であった。「写真結婚」が流行し始めた20世紀初頭は、特にカリフォルニアを中心として、白人による日本人排斥運動が本格化し始めた時期でもあり、日本人移民は、自らをアメリカに同化可能な、優秀な民族としてアメリカ社会に対し表明することが、一層重要となった。特に、その当時、在米日本人コミュニティに蔓延していた、賭博や売春といった風紀の乱れは、日本人全体の評判を悪化させ、排日感情に拍車をかけるとして問題視されていた。そこで、プロテスタント系教会を中心とした日本人キリスト教団体は、日本人コミュニティの矯風活動に着手することとなった。そして、一連の矯風活動の対象となったのは、「写真花嫁」たちを含めた、新たに渡米してきた日本人女性であった。

近年の歴史家の研究成果は、プロテスタント系教会を基盤とする日本人女性団体が行っていた、渡米日本人女性への慈善活動や教育活動が、日本人女

性として好ましいイメージや、ジェンダーの規範、エスニシティを普及させようとしていたことを明らかにしている。例えば、世紀転換期の北カリフォルニアの日本人移民社会における、アメリカ人及び、日本人女性キリスト教団体の活動を研究した、安武留美の論文では、日本人女性団体が「写真花嫁」を含む渡米女性を対象に、健全な在米日本人家庭を築き、妻・母としての役割を果たすことを指導し、そのことを通して、日本人コミュニティのイメージを改善しようとしていたことが、説明されている⁶⁴。また、1895年から1942年における、ロサンゼルス⁶⁵の3つの日本人プロテスタント教会の慈善活動を分析した、ブライアン・マサル・ハヤシの研究では、活動の主体であった日本人教会の女性たちは、移民女性たちに対し、アメリカ文化への同化を促していただけでなく、日本人としてのナショナル・アイデンティティの維持も奨励していたことが提示されている⁶⁶。このように、日本人移民女性とキリスト教会団体との関わり合いを扱った近年の研究は、集団としての「写真花嫁」が、歴史的背景のもとに日本人移民社会の中でどのように位置づけられ、どのような役割を期待されていたのかを、解明しつつある。

カリフォルニアにおける日本人教会の矯風活動は、同胞の間に蔓延する売春を撲滅するため、19世紀末に、プロテスタント諸派の教会に所属する、中流・上流階級の日本人女性によって着手された。これらの女性たちは、各所属教会に婦人ホームを設立して、夫との対面を待つ渡米してきたばかりの「写真花嫁」や、親の保護を得られない独身女性、学生、「正業」に従事している就労女性に、修養や教育、宿泊施設を提供した⁶⁷。これらの婦人ホームは、先駆者であるアメリカ人教会の女性社会事業家たちが、主に中国人売春婦の救出、保護、更正を行っていたのとは対照的に、いわゆる「まとも」な渡米日本人女性を活動の対象としており、売春婦には一般にその門を閉ざしていた。安武が指摘している通り、ほとんどの日本人教会の女性たちは、日本人売春婦を「近代日本と近代日本女性のイメージを下げる『国辱』として見なし」ていたためである⁶⁸。特に、20世紀初頭の日本人移民社会の指導者たちは、中国人売春婦の存在こそが、中国人排斥運動の原因であると認識し、

白人アメリカ社会に高揚しつつある排日運動を鎮め、在米日本人社会を発展させるためには、日本人売春婦を日本人コミュニティから一掃し、本国へ送還することが急務であると考えていた⁸⁹。即ち、日本人女性キリスト教団体の活動は、売春婦の排除を主軸に、「純潔な」日本人女性の保護と「墮落」防止のために行われたのである。

各教会毎に行われていた婦人教育活動は、20世紀に入り、諸教派合同での形式を以って行われるようになる。例えば、1905年、組合派と美以派は、合同でオークランド婦人矯風会を設立している。1912年、桑港日本人基督教女子青年会（以降、桑港 YWCA と呼ぶ）がサンフランシスコに結成され、また、1919年には日本救世軍がカリフォルニア日本人社会の矯風活動に着手している。

さらに、これらの教派を超えた日本人キリスト教団体は、活動にあたって、日本の本部・支部組織と密接な繋がりを保っていた。例えば、オークランド婦人矯風会設立当時、副会頭及び、記録書記を務めた、大久保音羽、落実姉妹は、渡米以前には、高崎婦人矯風会の活動に関与していた。落実は、後に東京婦人矯風会の会頭を務めている⁹⁰。また、オークランド婦人矯風会は、盛んに日本の矯風会から代表団を招いて、講話会を開いている⁹¹。桑港 YWCA も、太平洋を挟んで日本の本部と連絡を取り合い、視察団を招いたり、横浜に設立された渡米婦人講習所と連携して、渡米女性のための教育活動を行っていた⁹²。

カリフォルニアの日本人コミュニティで発達した、これらのキリスト教矯風団体の他に、日本においても渡米を控えた女性に教育を提供する、キリスト教系の団体が設立されていた。1909年、島貫兵太夫率いる力行会は、在米日本人移民の花嫁を養成することを目的に、力行女学校を設立した⁹³。また1916、7年頃には、本来、アメリカ東部州の学校に留学する日本人女性の指導にあたっていた清和女学園が、「写真花嫁」を対象に、渡米に備えての教育を始めている⁹⁴。これらのキリスト教系団体は、在米日本人移民の妻となる女性たちが、アメリカで恥をさらさぬよう、教育と修養を積んだ近代日

本女性の代表として養成し、渡米させることを目的としていた。

以上のように、日本人移民女性史研究、及び日本人キリスト教団体の活動を概観して言えることは、キリスト教団体の矯風・教育活動は、多様な個人的背景を持つ「写真花嫁」たちに、共通したジェンダー規範、及びエスニシティーを確立するものであった、ということである。さらに、この論文では、これらのキリスト教団体の活動は、女性たちを、労働者、農民を含めた在米日本人生産者の妻という階級に単一化する試みであった、ということを指摘したい。この論文は、近年の研究の成果を踏まえつつ、カリフォルニアと日本を繋いで行われた、日本人キリスト教団体の「写真花嫁」たちの教育活動に歴史的分析を加え、諸団体の教育方針や渡米女性に対する見方の中に浮かび上がって来る、「写真花嫁」像を考察する。具体的には、日本人YWCA及び力行女学校で行われた、渡米を控えた日本人女性への教育活動を、分析の対象とする。そのことを通して、これらの教育活動が、在米日本人コミュニティにおいて、階級区分を形成する役割を担うものであったことを提示したい。即ち、筆者はキリスト教団体の立場から距離を置き、「写真花嫁」のイメージが生まれたその構造を、在米日本人社会の階級形成という視点から指摘するものである。

日本人YWCAの活動

桑港YWCAの成立は、日本人キリスト教諸派の連合団体であるキリスト教伝道団が、1912年2月に開催した評議員会において、その設立の必要性を承認したことに始まる⁹⁸。キリスト教伝道団は、在米日本人社会の風紀矯正と福音活動を活動の目的としており、特に渡米女性問題は、伝道団が最も力を入れて取り組んでいたものの一つであった⁹⁹。同年3月、桑港YWCA設立趣旨が宣言され、4月には、発起委員の中から初代役員として、会長、小室兼子（小室篤次牧師夫人）、副会長、森下ひろ子（森下亀太郎夫人）、会計、宮崎島子（宮崎小八郎牧師夫人）、幹事、小林徳子（伝道団幹事小林政助夫人）、寄宿舎監督、大久保音羽、そして総委員長、安孫子余奈子（安孫子久

太郎夫人)が就任した。役員は、いずれも、在米日本人社会の指導者たちの夫人であり、錚々たるメンバーであった。発起委員らは、在米日本人社会の指導者や企業家などの人脈を通じて運営資金の調達に奔走すると同時に、会員を集め、サンフランシスコ市内の借家に事務所と寄宿舎を設立して、7月末に発会式を挙げた⁹⁰。

桑港 YWCA の主な活動は、新たに渡米してくる日本人女性に修養、英語、洋裁、西洋式作法、音楽などの教育や娯楽、そして寄宿舎を提供することであった。また、役員たちは、サンフランシスコ港やエンゼル島を訪れて、到着したばかりの日本人女性や、移民局に収容されている女性たちに面会し、桑港 YWCA の活動を紹介するとともに、参加を促した。1914年、ロスアンゼルスとサクラメントのそれぞれに支部が設立され、1917年には、桑港 YWCA は、ロサンゼルス支部との共同により、機関紙『女子青年』を発行するに至った。更に、1916年以降は、従来の渡米女性の教育に加えて、日系二世アメリカ人子女教育にも、力を注ぐようになっていった⁹¹。

これらの慈善事業、教育活動を普及させるにあたって、桑港 YWCA の役員たちは、アメリカ人 YWCA 会員や教会に所属する白人女性たちの協力を大いに得ていた。例えば、施設には英語クラスの教員として、常に数人のアメリカ人女性がいた⁹²。また、アメリカ人 YWCA 会員の中で、日本語を話せる女性は、到着した日本人女性の出迎えのために、エンゼル島移民局まで足を運んだ⁹³。桑港 YWCA が主催する日米親善のための会合や催しもの多くは、アメリカ人 YWCA との共催によって行われ、在米日本人社会やカリフォルニアの地元要人が招かれた。例えば、1915年に開かれた音楽会の主賓の中には、排日派で知られる、アンソニー・カミネッティ移民総監もいた⁹⁴。そのためもあって、桑港 YWCA は、移民局の信任も篤く、桑港 YWCA 保護のもとに、仮上陸を許された「写真花嫁」も多かった。1920年、桑港 YWCA はアメリカ YWCA 外人部に、そして1922年には、サンフランシスコ市社会事業同盟に加盟されるに至った⁹⁵。

在米日本人移民のアメリカ定住を促進する、桑港 YWCA にとって、続々

と流入してくる「写真花嫁」たちを教育し、健全な在米日本人家庭を増やすことは、活動の第一義であった。総委員長である安孫子余奈子は、従来の婦人ホームは、主として「宿泊する婦人中には、如何わしい場所へ参った婦人」が入っていたことを指摘した後で、「真面目な正しい婦人」を修養する場としての寄宿舎の設置が必要であると訴えている。桑港 YWCA 設立以降、寄宿舎は「米国風を少しも知らぬ婦人」を修養するための、最も望ましい場所として、その経営には、特に力が注がれた⁸⁹。

また、その一方で、桑港 YWCA 役員たちは、離婚、姦通、駆け落ちといった、在米日本人家庭の問題の主な原因を、「写真結婚」に見ており、特に「写真花嫁」の西洋文化や、習慣に対する無知と虚栄心こそが、家庭不和の元凶であり、ひいては排日運動の種になり、在米日本人の定住と発展を妨げるものであると認識していた⁹⁰。

そこで、安孫子を始めとする役員たちは、活動の当初から、「写真結婚」を、日本とカリフォルニア双方の YWCA の連携によって取り組むべき問題として捉えていた⁹¹。すなわち、日本人 YWCA の活動の特徴は、「写真花嫁」たちが、日本を出発する以前からアメリカに落ち着くに至るまでの、一部始終において、女性たちを徹底的に指導し監督することであった。桑港 YWCA は、東京の本部に頻繁に通信し、活動内容について相談を求めた⁹²。また、在米日本人女性の状況や、桑港 YWCA の活動内容は、東京で発行されている機関紙『女子青年会』を通して、日本の会員に紹介された。

さらに、1915年には、安孫子の熱心な要請により、東京本部より河井道子総幹事が、太平洋岸州の在米日本人コミュニティ視察のために派遣された⁹³。河井の視察旅行は、一年半もの長期に及び、サンディエゴ、ロスアンゼルス、サンフランシスコ、シアトル、ビクトリア、バンクーバーなどの都市及び農村の日本人コミュニティを訪れた。そこで河井は、在米日本人女性、特に「写真花嫁」の有様に慨嘆し、在米日本人発展にとっての重大問題として認識するに至る。帰国早々、河井は、在米日本人女性の様子を『女子青年会』で報告しているが、「写真花嫁」については、特別に「田舎に於て

農夫或いは漁夫に嫁する女子」と、「市邑の小商人労働者に嫁する女子」の二種類に分類し、それぞれに分析、批判を加えている⁸⁰。

前者の種類に属する「写真花嫁」は、河井によれば、一般に鹿児島、山口、福岡、熊本、和歌山、山梨各県の農村や漁村出身の、教育水準の非常に低い女性たちであるとされている。花嫁たちは、ハワイに移民した後に、カリフォルニアに転向移民して来た、同郷出身の日本人労働者たちのもとへ嫁いできたのであり、その移民形態について河井は、「純粹の日本の極田舎」から「米国の田舎」へ移住してきたと、説明している。河井は、花嫁たちの家事や育児の様子、また英語を習得せずに出身地方の方言を使用している点を指摘しながら、花嫁たちは、非衛生的で垢抜けない、日本の田舎の生活様式や習慣をそのままアメリカに持ち込んでおり、アメリカの文化や習慣を学ぶという意味での「向上心」や「進歩」が欠如していると批判している。また、河井は、花嫁たちが家事や育児を怠り、夫と共に農作業をしていると指摘し、共稼ぎは「米国人の最も嫌厭する処」であり、「到底米国に同化する事は不可能」であると非難している。結論として、河井は、「斯の如き有様にある事が米国の田舎に於いて我が同胞姉妹方の発展する事の出来ない一大原因」であると述べている⁸¹。このように、河井が報告する、アメリカの田舎の日本人労働者のもとにやって来た「写真花嫁」は、アメリカの文化や習慣を全く身につけていない、地方出身の教育水準の低い女性たちとして、まとめられる。

これら田舎の「写真花嫁」に対し、都市の日本人労働者のもとに嫁いできた「写真花嫁」について、河井は、比較的世慣れした、ある程度の教育のある女性たちであるとし、その中には、日本の高等教育を受けた、社会的地位の高い女性たちも見受けられると、付け加えている。この種類に属する花嫁たちを、河井は、優雅で裕福なアメリカでの生活に慣れるあまり、仲介者や相手の男性が語る虚偽やアメリカでの成功話を鵜呑みにして渡米してきた、虚栄心の強い女性であると特徴づけ、「大胆」、「無鉄砲」、「不注意」、「軽率」といった言葉で表現している。河井は、都市に住む日本人夫婦の多くが、下

宿屋の一室を借りながら、そこで経済的に困難な生活を営んでいる現実を指摘し、そのような住環境では、「年若く無経験で経済に慣れざる婦人」には、「良妻賢母の実を挙げる」ことは出来ないと、批判している。また、想像とは異なる現実の夫や、生活に幻滅した「写真花嫁」には、夫以外の日本人男性との、姦通や駆け落ちなどの誘惑が多いことも挙げている。さらに河井は、町に住む花嫁の多くが、家政婦やウェイトレスとして、家の外に働きに出ていることを指摘し、「若し生活難の爲め斯く共稼が必要であると、米人にでも聞かせたら、それこそ排日問題に油を注ぐやうなもの」であると、警戒している⁹⁹。すなわち、第二種類に属する「写真花嫁」は、高等教育を受けた野心家で、浮ついた気持ちの為に身を持ち崩してしまったり、金儲けに走ってしまったりで、健全な家庭を築くことが出来ず、結局は排日運動を助長してしまう存在として見なされている。

河井の視察旅行の報告から、「写真花嫁」の現状及び、在米日本人家庭発展の危機を認識した、東京 YWCA の役員たちは、早速に、日本国内における問題対策事業を打ち出した。それは、修身の教えによる、日本人女性のジェンダー規範を基本に、西洋中流階級の分業的性役割の観念を取り入れ、西洋文化や習慣を身につけた、在米日本人生産者の妻の育成であった。その最も主要な事業として、1916年11月、日本移民協会横浜講習所との提携により、横浜基督教女子青年会渡航婦人講習所（以降、渡航婦人講習所と呼ぶ）が設立された。

渡航婦人講習所は、西洋式の居間、寝室、食堂、台所、浴室、手洗い場を完備した、三階建の洋館と寄宿舎からなり、そこで、渡米を控えた日本人女性が、アメリカの生活様式を擬似体験しながら、模範的な在米日本人家庭のあり方について、学ぶしくみになっている。具体的には、修身（6時間）、渡航注意（5時間）、英語（5時間）、西洋作法・習慣（6時間）、西洋式家政法－料理・洗濯など（6時間）、衛生（3時間）、西洋式育児法（2時間）からなる学課目が、日本人とアメリカ人講師の両方により、女性たちに無料で教えられた（各学課目に充当された時間の基準については不明）。

渡航婦人講習所の設立とともに、横浜 YWCA は、渡航婦人講習所の活動内容を説明する概要書を発行し、横浜近辺に滞在して船を待つ渡米日本人女性を中心に、広く女性たちに配布して、講習への参加を促した。加えて、横浜 YWCA は、渡米女性のための、横浜滞在中の宿泊施設の世話、神戸及び、長崎より出発して、横浜に寄港する渡米女性のための懇親会の開催、アメリカ移住先の最寄りの日本人 YWCA 支部の紹介、手荷物や所持品の準備の手伝い、さらに「写真結婚」の相手である、在米日本人男性の身元調査も代行した⁹⁰。

また、1915年より、横浜及び神戸 YWCA は、『渡米婦人心得』と『在米日本人基督教女子青年会案内』の、二種類の葉を発行し、横浜、神戸両港から出発する日本人女性に配布した⁹¹。特に、『渡米婦人心得』は、旅行の準備からエンゼル島上陸に至る全行程を、「仕度の事」、「船中の心得」、「上陸の心得」の三つの段階に分けて、身なりや所持品、行動、態度の面において、日本人女性が、特に注意を要する点を指導するものであった⁹²。

さらに、1917年7月より5ヶ月間にわたって、「渡米者の葉」と題する記事が、機関紙『女子青年会』に連載されている。これは、三人の「写真花嫁」が、西田夫人という女性の指導を受けながら、アメリカに向けて渡航するという、物語形式を用いて、渡米女性に注意を啓発するというものであった。西田夫人は、夫と共にニューヨークに渡り、アメリカの事情や西洋習慣に精通し、教育のある、模範的な近代日本人女性として、また、三人の「写真花嫁」は、質素な田舎娘ではあるが、真面目な女子として、設定されている。物語は、西田夫人が、三人の「写真花嫁」を東京の自宅に招いて、仕度の指導をするという場面から始まり、船中の場面へと移る⁹³。

会員を除いて、何人の「写真花嫁」が、実際にこれらの手引きを読んで参考にしていたか、不明であるが、これらの資料からは、日本人 YWCA が如何に白人の目に映る日本人女性のイメージを意識していたかが、覗かれる。『渡米婦人心得』及び「渡米者の葉」は、ともに、「写真花嫁」が、西洋人から売春婦や下級の身分層として見られないために、渡航の際、実際に遭遇す

ると想定される状況において、取るべき行動を、西洋の中産階級のジェンダー規範から鑑みて、細かく示唆することを趣旨としていた。

まず、第一に、「渡米者の栞」では、船中の身だしなみについて、西田夫人は花嫁たちに、衣服や所持品など、「人の物笑になる様な可笑な風」を避けることを注意している⁹⁰。例えば、洋服は、派手な色や柄のものは避け、黒か濃紺のシンプルなものにすること、下着、靴、ストッキング、コート、手袋、帽子、ハンカチを必ず揃えること、着物を着る場合であっても、ショールや袴、またはストッキングを着用し、脛や足を出さないこと、手や爪は清潔にしていること、人前で鼻をかんだりしないこと、髪を高く結い上げるのは、流行遅れなのでしないことなど、細部にわたり注意を促している。その中でも、日本人女性の化粧法は、最も厳しく指摘された。西田夫人は、「日本の厚化粧をして居ると見好く御座いませぬ、別して船などで顔丈コテコテ塗って頰が真黒で平気で居たり、頭丈け油でテカテカさせて素足で帯びもめずに居りますと一等客の西洋人など『あれは醜業婦だろう』などと批評しますから何でも整然として居なくてははいけません。」と、花嫁たちに諭している⁹¹。

行動面では、特に、男性乗客との関わり方が、指導の中心とされた。『渡米婦人心得』では、「男子の室、並に男子の便所に入らぬこと」や、「特別親切にしてくれる男子に警戒し身に隙を見せぬこと」などが、記されている⁹²。また、「渡米者の栞」でも、これらの注意に加えて、船中において、男性と甲板に出て談笑している日本人女性を描写しながら、「極下品」な態度であると、指摘している⁹³。これらの注意は、日本人 YWCA の女性たちが、西洋人の目に映る日本人女性のイメージを過敏なまでに意識した結果であるのと同時に、「写真花嫁」が、渡航中に夫以外の男性との、誘惑に巻き込まれないための、配慮でもあった。

さらに「渡米者の栞」は、エンゼル島上陸の際にも渡米日本人女性に、身だしなみや、行動に細心の注意を払うよう、呼びかけている⁹⁴。エンゼル島は、「写真花嫁」たちが、移民官、すなわちアメリカ白人の眼前に、初めて

さらされる公式の場であった。また、「写真結婚」全盛期の、1910年代には、島を訪れる地元のアメリカ人にとって、「写真花嫁」は、注目の的となり、一日「花嫁」を見ようと、移民局に詰め寄せた見物人が多かった。「花嫁」たちの上陸風景は、地元新聞にも掲載され、排日運動高揚のための格好の素材となったため、在米日本人社会の指導者たちは、「写真花嫁」たちが、地元アメリカ人に与える印象を常に懸念していた。

カリフォルニア視察旅行中に、エンゼル島移民局を訪れた河井道子は、大勢の地元の見物人が、「写真花嫁」たちを取り囲んで、好奇の眼差しを向けながら、「写真結婚」は、非人道的な習慣であると非難しているところを目撃しており、「写真花嫁」が注目されることで、アメリカ人の排日感情が、悪化することが懸念されると、『女子青年会』に報告している。河井は、これらの「写真花嫁」が、英語も分からずに、ただ哑然とした表情で、見物人に取り囲まれ、気後れしている様子を、「口惜しけれ」と、嘆いている⁹⁹。さらに、それらの「写真花嫁」の多くは、特に広島、福岡、熊本、和歌山、滋賀、愛知、静岡県の地方出身の「小学校さへ卒業せぬ程度」の「無教育の女」であると、記述している¹⁰⁰。続けて、女性たちの身なりや、容貌について、「下手な田舎洋服師の仕立てし肩巾を狭くせし看護婦用の如き洋服を着せるあり」、「今も尚顔より高く前髪を出し、短き毛の前後に乱れ下るを其俛になし、顔には斑や厚く白粉を塗りし」と言及し、「如何にも米人には異様に、且不潔に見るとか、注意を要する点多し」と、締めくくっている¹⁰¹。

「渡米者の菜」の最後に、西田夫人は、「実際農業をしたり小店をしたり、西洋人に使われる男女が一番に彼地の日本人問題となっています。（中略）若し一人が不正直で不性で金銭にばかり心が向く様であると、日本人全体の名誉にかかはりますから、決して労働者だからどうでもよいなどと思ってはなりません」と、三人の花嫁に述べ、妻としての渡米日本人女性たちの、責任の大きさを強調している¹⁰²。そして、『渡米婦人心得』、「渡米者の菜」共に、移住後はサンフランシスコやロサンゼルス日本人YWCAを頼り、修養と教育を積むようにと、渡米日本人女性たちを、励ましている。

こうした、日本人 YWCA 女性たちが、「写真花嫁」に対して抱いていた、無知、無教養、虚栄心、身持ちが悪い、といった見方は、教育活動を経ても一貫して変わることがなかった。例えば、排日運動家により、「写真結婚」がやり玉に挙げられていた、1919年4月当時に発行された『女子青年会』には、アメリカの大学院で学び、日本女子大学で教鞭をとった、高梨孝子の記事が載せられている。記事は、高梨が、サンフランシスコからの帰国の船の中で、船員から聞いた話を盛り込みながら、「写真花嫁」たちの見苦しさや、教養のなさを説明するものであるが、そこで、特に強調されているのは、花嫁たちの道德観念の無さである。例えば、「写真結婚」で渡米する日本人女性について、高梨は、「旅費を出して貰ったといふ義理から心に染まない人の妻になるのは僅かのお金の為に女の操を売る様なもの」とであると、船員に述べている⁴³。これに対して、船員は、「写真結婚なんかで行く女で無垢の者は少ない」と高梨に言い返している⁴⁴。そして、「写真花嫁」は、乗船を待って港の近くの宿屋に逗留しているうちに、日本とアメリカの間を行き来する、やくざな男に誘惑されてしまい、「いやにハイカラな風をして無智な、無経験な処女」であった花嫁たちも、アメリカに到着する頃には、すっかり「擦れっ枯らし」になっているのだと、船員は説明を続けている⁴⁵。

高梨の記事からは、「写真花嫁」は、健全なる在米日本人家庭形成の大切な担い手であり、よって、援助を提供するべき存在であるという、前向きな視点は覗われない。それどころか、高梨の「写真花嫁」に対する論評は、冷笑的で、突き放しているかのようである。そして、日本人 YWCA が、本来、活動対象から除外してきた売春婦と類似したイメージとして、「写真花嫁」を扱っているという点が、ここに指摘されるのである。すなわち、かつて、売春婦が在米日本人社会の風紀を乱し、日本人移民の出稼ぎ根性を助長する、排日の元凶としてみなされ、コミュニティから排除されたのとはほぼ同様の感覚で、今度は「写真花嫁」が、無知と虚栄心、使命感の乏しさ故に、健全な家庭を築くことが出来ずに、結局は、日本人移民の出稼ぎ根性に荷担しながら、排日の元凶となっているとされ、見放されているように覗われる。結

局、日米双方のYWCAにおける教育活動を行う日本人女性の間で、「写真花嫁」とは、下層階級の日本人移民が行う「写真結婚」という手段で呼び寄せられた、下層階級の在米日本人女性のことであるという蔑視的な認識が、上流・中流階級の在米日本人女性とは区別されるかたちで、定着していったと言える。

力行女学校の活動

力行会の渡米移民の教育及び推進事業は、神田教会の牧師であった、力行会創始者、島貫兵太夫が、1897年にアメリカへ視察旅行に出かけたことをきっかけとして、着手された⁴⁹。本来、力行会は、キリスト教精神に基き、東京で働きながら、高等学校や専門学校で学ぶ、苦学生の救済活動を行う団体として、1897年1月に設立された。当初、島貫は、新聞や牛乳配達、筆墨紙の行商などによる救済事業を行っていたが、どれも捗々しくない状況にあった。そんな折、アメリカでは、学生が働きながら大学まで卒業するという話を聞き、島貫は、実際のアメリカの学生や慈善事業の様子を調査するため、同年11月に渡米した。渡航の船の中で、島貫は、日本人移民たちの風紀の乱れが甚だしいことに驚き、移民教育の必要性を痛感している。この時の経験が、島貫が後に、力行女学校を設立する動機の一つとなった⁴⁹。

視察旅行の結果、島貫は、苦学生の学業と労働の両立が可能な、アメリカこそが、日本人の成功と発展のために、望ましい地であると確信し、帰国後、1898年に、渡米部を設立して、苦学生の渡米事業に着手する。個人の立身出世は、明治日本の青年男子にとって、共通の目標であり、特に1905年の日露戦争以降は、個人の成功の手段として、海外移民が日本国内で盛んに奨励された。島貫は、日本人移民事業を、個人の成功と平行して、日本民族の海外膨張の観点からも、積極的に推進していた⁴⁹。力行会の渡米事業を説明する著書の中で、島貫は、渡米者が「立派な基督信者で、文明的態度をもって、白人の間に勢力を得るに至るなら、日本人排斥など居ふ厭ふ可き声の全く消滅するのみか、日本民族の真価を世界に輝して何等の平和を破ることなし

に日米問題は解釈され、日本人の真発展の基礎が根強く築かる事と思ふ」⁸⁹と述べ、渡米移民のアメリカ定住を強く奨励した⁹⁰。

島貫は、在米力行会会員の慰問と、力行会会員を母体としてサンフランシスコに設立された、リフォームド教会の発会式参加のため、1906年および1908年に再び渡米した。そして、それらの在米日本人視察の経験から、渡米日本人婦女子の教育事業として、帰国後、1908年に、文部省認可を経て、力行女学校を設立した⁹¹。島貫をはじめ、力行会会員は、当時の在米日本人社会の指導者たちと同様に、日本人コミュニティーの風紀の乱れは、独身労働者の出稼ぎ根性に帰するもので、本来の、日本人のアメリカ移民活動の目的である、個人の成功と日本民族の発展を実現させるためには、在米移民が家庭を持ち、定住する意志を固めることが必須であると確信していた⁹²。また、島貫は、アメリカ市民権、及び選挙権等の政治的権利を有する、日系二世アメリカ人の人口が増大すれば、在米日本人勢力は、一層強固なものとなり、現存する排日運動も自然に消滅すると考えた。そして、その観点からも、日本人女性の渡米を強く奨励していた⁹³。

島貫は、従来の「写真結婚」は、無知で虚栄心の強い花嫁と、虚偽の情報を語る男性が多すぎたために、満足な結果を生み出して来なかったとし、特に渡米する日本人女性に、在米日本人移民を支える忠実な妻として、相応しい教育を受ける必要があると主張した。したがって、力行女学校の目的は、「(一) 精神修養を重んじ健全にして堅固なる品性並に意志的活動の妻女たり母たるの婦人を造るにあり (二) 日本今日の家庭を治むるに少しも差支なき実力ある婦人を造るにあり (三) 独立自営的の婦人を造るにあり (四) 在米同胞の内助者たるに適し又は渡米成功するに適する婦人を造るにあり」と、定められた⁹⁴。

力行女学校は、厳しい学則を定め、高等教育を受けた、身元の明確な、財政源のある女性に、入学を限定した。具体的には、学則第四条として、「入学者の資格は、高等女学校卒業生若しくは年齢十六年以上にして是と同等の学力ある者とす」と、規定されている。入学希望者は、願書と履歴書を提出

し、その後、試験によって入学の是非が決められた。力行女学校の人気の高さと、選考の厳しさは、「かくて一度力行女学校の設立を世に発表するや全国の海外発展の志のある婦人が吾が女学校に入学を志望してきた、然し試験を厳格にして無闇に入学を許可しなかった」と、島貫が伝えている通りで、開校年である1908年には、400人を超える受験者の中から、60人に合格者が絞り込まれている。晴れて入学を許可された女性たちは、東京在住の親類、あるいは知り合いで、かつ一家の家計を支えている人物を身元保証人として立て、力行女学校宛てに在学証書を提出することが義務づけられた。女学校に入学するための経費として、合格者は受験料50銭、入学金1円、そして、一年間の授業料30円、すなわち、合計31円50銭を、初年度に収めなければならなかった⁶⁹。1907年当時の、政府官僚の平均月給が、25円であったことから見ても、力行女学校の学費が、高額なものであり、力行女学校が、経済的な余裕のある家庭出身の女性を、入学者の対象としていたことが窺われる⁷⁰。

入学者は、「修身、国語、英語、地理、歴史、数学、理科、音楽、和洋料理法、ミシン裁縫、簿記、経済、法律、和洋洗濯法、和洋家内掃除法、常識訓練」からなる必修学課目を、一年ないし二年かけて履修し、試験、及び普段の受講態度から、各学期ごとに成績が付けられ、その成績に基いて、次年度の及第あるいは落第が決定された。そして、晴れて所定の課程を修了した生徒には、卒業証書が授与された⁷¹。

力行女学校の教育は、教養性よりも実践性に主眼を置いていたが、同時に精神修養の側面にも力を注いでいた。この点に関して指摘しておきたいことは、力行女学校は、日本人YWCA同様、修身を渡米日本人女性の倫理教育の基盤としている、ということである。本来、武士階級の倫理思想であった修身と、プロテスタンティズムの倫理思想には、共通点が多いことから、島貫をはじめ、武士階級出身者が、明治以降、精神の拠り所として、キリスト教を受容したと言われている⁷²。また、後述する通り、良妻賢母思想は、当時の日本のキリスト教系の高等女学校や女子大学においても、教えられていた。力行女学校や、横浜渡航婦人講習所で、実際に、どのように修身教育が

行われていたかは、まだ明らかではない。しかしながら、力行女学校、日本人YWCAとともに、正式学課目として、キリスト教倫理を設けることなく、修身を掲げていたということは、両団体が、渡米女性の倫理教育に際し、何を主眼に置いていたのかを考察する上で、重要な点であると言える。

さらに、力行女学校では、生徒たちの精神修養の効果を一層高めるために、女子寄宿舎を設立している。そこでは、毎年7人から20人に及ぶ女子生徒が、島貫と妻しか子の監督のもとに寄宿舎で共同生活をしていた。このように、力行女学校は、渡米女性たちを、修身の倫理教育を土台として、教養と実践的技能を備えた内助の功としての妻を養成する機関を自認していた。島貫は、生徒たちの中には、「学問を鼻にかける生意気なハイカラ女」は一人もいないと、自負していた程であった⁸⁹。

こうした、理想的な「写真花嫁」の育成に併せて、力行会は、在米日本人移民のための、結婚仲介の機関としても実質上機能していた。力行女学校の活動は、在米日本人移民の間で知られていた様子で、移民男性の多くが、アメリカから日本の力行会宛てに、自己紹介の手紙を送り、力行女学校出身者との結婚仲介の依頼を申し込んで来たことを、島貫は伝えている。力行女学校を卒業した婦人たちは、力行会に結婚を申し込んで来た移民男性の身元、職業、素行、評判などについて、在米日本人コミュニティーの指導者や教会牧師、領事館などに、詳しく問い合わせ、その上で、お互いを双方の両親に紹介し、また、親戚や友人など周囲の人々にも公表して、文通による交際を、時間をかけて進めるように指導された。「故に間違いを生ずる事も無く、所謂写真結婚より来る弊害も勿論なく現在に於ては至る所に評判がよい」と、島貫は、その成果を伝えている。さらに、島貫は、「今日の状態を持続して行けば確に有力なる大和民族の家庭は力行女学校の卒業生によって造らるることとなるのを信ずる、之れは実に大和民族を彼の地に植え付けるところの大事業であって、且又戦争無しに日米問題を平和に解決する唯一の方法である」と、述べている⁹⁰。

こうして、1911年までには、百に及ぶ在米日本人家庭が、力行会によって

創出され、また、サンフランシスコには、力行女学校卒業生の渡米女性の同窓会が設けられた⁹⁰。1914年6月30日付けの、日本人コミュニティ新聞、『新世界』は、毎年、渡米してくる「写真花嫁」のうちの、30人から40人は、力行女学校の卒業生であったと、伝えている⁹¹。仮に、この数字に依拠すれば、「写真花嫁」の総人口の約4%から7%は、力行女学校の卒業生であったという概算になる。また、別のコミュニティ新聞『日米新聞』では、1916年10月3日付けの記事の中で、「力行会の手を経て海外在住の邦人に嫁ぐ婦人等」が、「此頃減切多くなった」と、報じている⁹²。在米の独身移民男性が、どのようにして力行女学校の活動を知り、力行会に「写真結婚」の仲介を依頼するに至ったのかは、不明である。既に力行会渡米部から、会員が多く渡米しており、日本に通信を送っていたことや、力行会会員専属の教会として、サンフランシスコにリフォームド教会が設立されていたことなどから、島貫が「写真花嫁」募集に関する情報を、力行会会員やリフォームド教会を通して広報していたであろうことや、申込者の多くが、力行会会員、またはリフォームド教会会員であったことが想定されるが、実際の状況については、明らかにされていない。しかし、特定の在米日本人移民の間で、力行女学校が「写真花嫁」養成所として期待され、力行会が「写真結婚」仲介機関として信頼されていたことは、事実であると言えよう。

力行女学校に所属する生徒の多くは、四国、九州、中国地方と福島県出身の、20代半ばから30歳くらいまでの女性たちで、小学校教員や看護婦などの職業に従事していたために、日本では、婚期を逸してしまっていたと、日本人コミュニティ新聞では、説明されている⁹³。「写真花嫁」の一般的特徴として、その多くが、当時の結婚適齢期を過ぎていたことと、高等教育を受けていたことは、アイリーン・スナダ・サラソンの渡米日本人女性のオーラル・ヒストリーによっても、検証されている。サラソンは、「日本の基準から見て、いわゆる理想の日本人女性は、一世の男性には手の届かない存在であった」と述べ、「移民男性自身が結婚適齢期を過ぎていたこともあって、彼らの花嫁として残されていたのは（中略）年齢の過ぎた女性であり、それ

と並んで、やはり日本では、妻としてはあまり望ましくない、高学歴の女性であった」と、加えている⁶⁸。

1913年に島貫兵太夫が亡くなった後、しか子夫人が事業を引継ぎ、精力的に渡米女性の教育と、在米日本人移民の「写真結婚」仲介に取り組んだ。しか子は、1915年、アメリカに千世帯の日本人家庭を築くという抱負を抱き、手には渡米希望の日本人女性70人の写真と履歴書を携えてアメリカに渡り、太平洋岸の都市や農村、及びハワイの日本人コミュニティを訪ね、独身の日本人男性に縁談を紹介した。この「写真花嫁」斡旋旅行の企画に際し、しか子は、婦人雑誌、『婦女界』、『女学世界』、そして『婦人の友』に広告を出して、「写真花嫁」として、渡米を希望する独身女性を募った。これらの婦人雑誌は、当時の日本の中流以上の家庭の女性の間で人気が高く、高等女学校に通う女学生、職業を持つ女性の間で、広く愛読されていたものであった。しか子が出した、「写真花嫁」募集の広告に、応募した女性は300人を超え、その中から、70人が選ばれた。これらの「写真花嫁」は、17歳から36歳の、いずれも高等教育を受けた、教員や看護婦などの職業に従事する女性たちであった⁶⁹。

しか子がサンフランシスコに到着した時には、既に50人の日本人男性が、彼女が企画した「写真結婚」縁談に応募していた。全体で5ヶ月間に及ぶ「写真結婚」斡旋の旅行を通して、しか子は、カリフォルニア州においては、サンフランシスコを皮切りに、スースン、サクラメント、フロリン、ストックトン、モデスト、リヴィングストン、フレズノ、ロスアンゼルス、サリナス、ワッソングビル、モントレイ、サンノゼを巡回し、その後、シアトルへ赴き、サンフランシスコに戻り、帰国の途中にハワイを訪ねた⁷⁰。帰国後、しか子は、婦人雑誌、『真新婦人』において、斡旋旅行の報告をしているが、その中で、写真の中から花嫁を選ぶ場合、日本人移民男性が特に注目するのは、「容貌よりも寧ろ体格」である点を強調している。これは、労働者階級の移民男性が、花嫁に求めるのは、何よりも、アメリカでの移民生活の厳しさに堪えるだけの体力と精神力であるためで、従って、年齢も、二十歳程の

若い女性よりも、むしろ三十歳前後の結婚が遅れた女性や、再婚を希望する女性の方が、早く縁談がまとまると、しか子は述べている⁹⁰。「写真結婚」斡旋の旅の結果、しか子は、在米日本人移民に嫁ぐ「写真花嫁」として必要な条件は、心身共に強健であることと、英語が話せることであると実感したのであった⁹¹。

力行女学校に代表される「写真花嫁」は、二十代後半から三十代にかけての、高等教育を受けた職業婦人であったと、まとめられる。また、女性たちの多くは、女性の教育と自立に対する理解を持ち、援助するだけの、経済的な余裕のある、中流階級以上の家庭の出身であったことが、推察される。しかし、これらの女性たちは、周囲からは、娘盛りを過ぎた、独立心の強い女性として受け止められる傾向にあったため、いわゆる、当時の日本の、理想の花嫁の基準からは、逸脱した存在であった。力行女学校の、渡米女性のための教育活動や、「写真結婚」斡旋事業は、学問や技能を身につけて、経済的に自立し、社会人としての個人を確立することを志向しつつも、やはり、結婚して良妻賢母になることこそが、女性の務めであるという観念を、拭い去ることが出来ない日本人女性たちが多かったことを、示唆している。

以上のような、日本では嫁に行き遅れた女性たちにとって、力行女学校は、在米日本人移民の成功者の妻になるという、栄転の機会を与えてくれるところであった。力行女学校は、入学者たちに、在米日本人移民の妻となることは、日本民族の海外膨張を支えることと同義であるという、国家思想的な使命感を鼓舞し、夫と家庭を支えるために、移民生活に必要な実践的な知識と技術を指導した。力行女学校の卒業生のうち、一体どれだけの女性が、そのような使命感に燃えて渡米していったかは、定かではないが、力行会の仲介に応募した男女は、いずれもそういった思想的な意義よりも、個人の現実的な欲求に基いて、「写真結婚」を成立させていたと言えよう。

「写真花嫁」のプロフィール

日本人YWCA、及び力行会の例に見る通り、当時、日本人キリスト教団

体は共通して、「写真花嫁」を、中国、九州地方出身の、無知で垢抜けない、虚栄心の強い女性たちとして、認識していた。そして、そのような「写真花嫁」の特徴が、在米日本人家庭の問題の一大原因となっており、対策として、花嫁たちの教育が必須であると、考えていた。しかし、実際に、「写真花嫁」として渡米した日本人女性は、上記のように単純に特徴づけられるものではない。花嫁一人一人の日本における社会的背景は異なっており、また、「写真結婚」の動機も千差万別であった。花嫁たちの大多数が、農業に従事する家庭の出身であったことは、疑いようもない事実であるが、その中には、労働者階級以外の、中流階級以上の社会的出自の女性たちも多くいたことは、力行女学校の活動を通して、既に明らかである⁹⁹。「写真花嫁」が、多様な社会的背景を持つ、様々な地域出身の女性たちであったことは、前掲のサラソーンや、スーザン・マッコイ・カタオカによる、一世の日本人女性たちのオーラル・ヒストリーを分析した研究からも認められる。例えば、サラソーンは、「写真花嫁」の中には、父親の職業が、教員、聖職者、商家、企業家であった女性たちや、一等客船で海を渡った、貴族の出自の女性もいたことを紹介している¹⁰⁰。

女性の教育水準に関しては、「写真花嫁」のほとんどが、8年間の義務教育を修了していたと言われている。長野県出身の花嫁、キムラ・ミドリは、「一世の女性の多くが、高等女学校を卒業していた」と、述べている¹⁰¹。また、高等学校に進学していない場合でも、多くの「写真花嫁」たちは、義務教育修了後、花嫁修業として、お茶、お花、裁縫、一般作法などを習っていた¹⁰²。さらに、大阪女学院、神戸女学院、共立女子大学、日本女子大学など、主要都市の女子大学で学んだ女性たちもいた¹⁰³。これらの高等女学校、及び女子大学の中には、キリスト教系のものも多くあり、「写真花嫁」たちの中には、キリスト教の倫理に触れていた女性たちがいたことが推測できる。

明治生まれの日本女性である、「写真花嫁」たちに共通していたことは、学校教育や家庭生活を通して、修身教育が授けられていた、ということである。明治日本の国民的道徳倫理として、義務教育などを通して国民にあまね

く普及された修身は、女性に対しては、両親や夫に忠実に仕え、良妻賢母となることが女性の務めであると教えた。この良妻賢母思想の普及は、20世紀に入って特に発達した、女子高等教育の中核をなすものであった。特に、日清、日露両戦争後、良妻賢母思想は、日本の国民国家主義と海外膨張主義を支える思想として、明治政府により、公立、私立を問わず、女子高等教育機関を通して、女性の間に促進された⁸⁹。

修身が教える良妻賢母思想に加えて、多くの「写真花嫁」たちは、キリスト教の倫理観に基くジェンダーの観念の影響を受けていた。確かに、良妻賢母思想は、キリスト教系の高等女学校、及び女子大学においても唱導されていたが、修身のそれとは、異なる概念のものであった。すなわち、それは、女性史家、秋枝蕭子も述べている通り、「人格的に対等なパートナーとしての良き妻であり、子供らを良く教育できる教養ある賢い母」を意味していた⁹⁰。例えば、北海道出身で、キリスト教系の大阪女学院を卒業した、ミヤケ・キヨという「写真花嫁」は、日本人女性の従属的な地位を否定し、夫と妻が労働と信仰を共に分かち合うことこそが、理想的な夫婦のあり方であると考えていた⁹¹。

特に、これらの日本で高等教育を受けたり、専門的な職業を持っていた、「写真花嫁」たちを中心として、いわゆる「新しい女」に代表される日本のフェミニストが主導する、女性の社会的自立や性の解放、自由恋愛の謳歌といった、女性解放思想に触れたり、賛同したりした渡米日本人女性がいたであろうことも、多いに推察される。カタオカは、花嫁の中には、「写真結婚」を承諾した理由として、アメリカでは、女性は男性に尊重され、大切に扱われているということを挙げた女性がいたことを、明らかにしている。例えば、ある花嫁は、「単に夫の召し使いになるなんて、いやだった。機会の国、アメリカに來たかった。ここでは、女性にも権利が許されているから。」と、渡米の理由を述べている⁹²。このように、カタオカの研究は、個人の自立への強い欲求のために、渡米を希望する「写真花嫁」がいたことを提示している。「写真花嫁」の間に、どの程度、日本のフェミニズム思想が普及してい

たかを正確に把握することは、困難であるが、少なくとも、対等な夫婦関係や、女性の尊重を望んで渡米した花嫁がいたことは、確かである。日本人コミュニティの新聞紙上で、「新しい女」は、批判の対象として、頻繁に論じられており、「虚栄心の強い女」と並んで、在米日本人のジェンダー関係の秩序を乱す危険な女性像として、捉えられていた⁸⁶。このことから、フェミニストの存在の大きさが窺える。

当時の慣習から鑑みて、女性たちは、特に反発することもなく、両親が進めるままに「写真結婚」の縁談を受け入れているが、結婚を承諾した理由や、結婚に対する期待は、個人個人によって様々であった。家庭が経済的に豊かでないために、嫁入り道具を揃えることが出来ないということから、「写真結婚」を決めたという花嫁もあれば、一度目の結婚に破れ、再婚話として持ち上がった「写真結婚」に運をかけるという花嫁もいた。また、「写真結婚」をして渡米してしまえば、舅姑に仕えるという嫁の義務から逃れられると考えた女性もいた⁸⁷。例えば、大阪で洋裁をして自立していたという、広島県出身の「写真花嫁」アキヤマ・オナツは、「伝統的な、日本のイエのしがらみから、自由になれると思っていたので、アメリカに行きたくてたまらなかった」と、述べている⁸⁸。

その他の「写真花嫁」の渡米動機として、無視することのできない点は、やはり、多くの女性たちが経済的、文化的に豊かな西洋の文明国、アメリカに住むことに対して、憧れを抱いていたということである。当時の日本の若い女性たちの間で、「写真花嫁」としてアメリカに移住するということが、一種の流行であったことが伝えられている。ある花嫁は、「あの当時、アメリカに行くことが、流行っていた。アメリカの田舎で、ゆったりと暮らすのが私たちの夢で、だから、皆、我も我もとやって来た。」と、回想している。別の花嫁は、「ただ、とにかく来てみたかった。アメリカにいる男の人と結婚したかった。私の友達も大勢、こんな風に考えていた。」と、述べている。「写真花嫁」たちの多くは、アメリカという国に対し、自由、裕福、進歩といった、漠然としたイメージを抱き、それが女性たちの渡米の誘発要因となっ

ていた⁸⁹⁾。

以上に見てきた通り、「写真花嫁」としてアメリカに移民した、日本人女性のプロフィールは、出身地、社会経済的背景、結婚の動機も含めて、非常に多様なものであったことが、指摘される。これらの、多様な背景を持つ女性たちに共通していることは、彼女たちが、いかなる理由であれ、自らの意志で、「写真結婚」を好ましい結婚として承諾し、渡米の機会を得ていたということである。在米日本人社会の指導者たちは、こうした、「写真花嫁」たちの渡米への憧れを、「虚栄心」と称して非難していた。しかし、実際に花嫁たちの多くが、夢が消え去っても、厳しい現実の移民生活に耐え、夫を支えて、家庭を切り盛りしていた事実を考えると、それは、あまりに単純な決め付けである、と思われてならない。ここでは、オーラル・ヒストリーを分析した研究に依拠しつつ、「写真花嫁」の多様性を提示してきたが、今後は、花嫁たちがアメリカに入国する際に移民局に提出された書類などから、数量的な分析による検証が、求められる。

む す び

この論文は、日本人YWCA及び、力行女学校に焦点をあて、20世紀初頭の日本とカリフォルニアの日本人移民社会を結んで、展開された、日本人キリスト教団体の、「写真花嫁」への教育活動や慈善事業について、考察してきた。両団体ともに、在米日本人社会に蔓延していた、風紀の乱れを一層し、地元白人の排日感情を抑えて、日本民族の発展を促進するという観点から、多様な背景を持つ渡米日本人女性の間に、均質化されたジェンダーの規範を構築する役割を担った。日本人移民に先立つ中国人移民に対するアメリカの排斥感情が、売春や賭博に由来すると判断した日本人キリスト教団体は、在米日本人移民に、家庭を持ってアメリカに定住することを奨励しつつ、移民のジェンダー間の関係の改善に務めた。日本人キリスト教団体は、新たに渡米する日本人女性、特に「写真花嫁」たちを対象に、教育活動や慈善事業を開始し、日本人売春婦は、国辱とみなして、その門を閉ざした。こうして、

渡米日本人女性のジェンダー規範の構築は、在米日本人を、中国人移民とは異なる、世界の一等国出身の優秀な民族として、アメリカ社会に表明する試みであったと言える。

日本人YWCA及び、力行女学校は、ともに渡米日本人女性の西洋の中産階級のジェンダーの規範や習慣への同化を、近代化の指標として推進した。特に、渡米日本人女性を、西洋の習慣や規範に同化したイメージとして、アメリカ社会に表明しようとする傾向は、日本人YWCAの教育活動において顕著であった。日本とカリフォルニア双方の日本人YWCAにおいて、「写真花嫁」教育は、公の目（厳密には白人アメリカ人の目）に触れる日本人女性を、いかに上品、清潔、かつ優雅に見せるかに、集中していた。そのため、渡米日本人女性の服装、持ち物、立ち居振舞いから、また、異性とのコミュニケーションの取り方に至るまで、西洋中産階級のジェンダーの規範や道徳に反するものや、誤解を招くおそれのあるものは、細微にわたって否定された。また、料理や掃除など、実践的な家事作法についても、西洋式のものが、YWCA、力行女学校の双方で教えられていた。

「写真花嫁」を模範的な在米日本人妻に仕立て上げるという作業には、西洋中産階級の模倣と平行して、日本の国家的なジェンダー規範の承認も含まれていた。横浜渡米婦人講習所、力行女学校の双方において、修身が日本の中核的倫理思想として認められ、必修課目として、「写真花嫁」たちに教育されていた。即ち、夫に忠実に仕え、堅実な家庭を築くことに専心する妻を養成することが、渡米日本人婦女子への教育活動の究極的な狙いであった。この「健全な」夫婦関係や家庭建設にとって、危険であると見なされた要因は、徹底的に非難され、排除された。例えば、日本人YWCA、及び力行女学校は、アメリカにおける優雅で裕福な暮らしや、対等な夫婦関係を夢見て渡米してきた「写真花嫁」に対し、自己中心的な野心に満ちた、虚栄心の強い女性というレッテルを貼り、教育による花嫁たちの矯正を唱導した。言い換えるならば、これらの日本人キリスト教団体は、国家的使命としての、在米日本人社会の発展のためには、「写真花嫁」を良妻賢母として、均質化す

る必要性があると認識し、その均質化の最も実際的な手段として、日本の国民的倫理想である修身を用いたのである。

「写真花嫁」に対する見方や、教育事業に対する姿勢は、日本人 YWCA と力行会とでは、やや、異なっていた。日本人 YWCA においては、1912 年以來の、桑港 YWCA における、いわゆる、花嫁を受け入れる側の活動に加えて、「写真結婚」時代後期に相当する 1910 年代後半に入ってから、花嫁を送り出す側としての日本の活動が本格化され、渡米を目前に控えた日本人女性に、出来るだけ広く呼びかけていた。こうした時代的背景や活動の方法も反映してか、日本人 YWCA は、活動の当初から、一般に「写真花嫁」を、無知で洗練されていない、労働者階級の田舎者として見なす傾向にあった。そして、近代日本女性の代表として渡米させるには、花嫁たちは、あまりにも恥ずかしく見苦しいため、早急に教育を施す必要があると認識していた。日米ともに、河井道子や安孫子余奈子に代表される日本人 YWCA 役員は、「写真結婚」による在米日本人女性の増加には、基本的に賛成の姿勢を示していた。しかし、彼女たちは「写真花嫁」に対する評価は、一貫して侮蔑的なものであり、やがて「写真結婚」そのものを道徳観念の低い労働者クラスの習慣として、そして「写真花嫁」を野卑な下層階級の女性として、分類することに帰結した。こうした、中流、上流階級の在米日本人女性の、「写真花嫁」に対する冷笑的な見方は、「写真花嫁」が排日の材料として排日家に利用され、「写真花嫁」のアメリカ入国禁止が決定された、1919 年時までには、一層、強まったことが考察される。

一方、力行女学校を代表する渡米女性は、経済的、社会的に自立した、大人の女性たちであった。力行女学校の卒業生は、全員、厳しい入学審査を通過し、1 年から 2 年という長期に及ぶ必修課目の履修を経てきた。即ち、力行女学校の活動は、渡米日本人女性として相応しい基準を設定し、それに合わせて、入学者を取捨選択するところから始まるのである。そのため、力行会は、女学校の卒業生に対して、在米日本人移民の妻として完璧であるという、強い自信を持っていた。力行会創始者、島貫兵太夫は、在米日本人家庭

の問題を「写真結婚」の従来のある方に認めた。それは、言い換えれば、これまで「写真花嫁」として望ましくない日本人女性が、渡米していたということに問題は帰結する、というものであった。よって、島貫は、渡米女性に相応しい資質を備えた女性を「写真花嫁」候補者として選りすぐり、教育することで、問題は大方解決されると、判断した。このように、力行女学校の活動は、「正しい」「写真花嫁」を実践的に養成し、そして、卒業生を在米日本人移民に紹介して、「写真結婚」を仲介した。また、島貫没後は、妻しか子を中心となって、力行女学校出身者に限らず、「写真花嫁」の基準に該当する女性たちに、積極的に在米日本人移民との結婚を斡旋した。

上述の、日本人YWCA、及び力行女学校が行った、渡米日本人女性の教育活動は、結果として、多様な社会的、経済的背景を持つ日本人女性を、在米日本人生産者階級の妻という枠組みに囲い込むという特徴を持っていた。特に、日本人YWCAは、多種多様な渡米女性たちを、無知で虚栄心の強い田舎者という一本調子で見方でまとめ、教育を施されなければならない女性たちとして見なす傾向が強かった。それは、在米日本人女性の間で、文明を授ける立場としての中流、上流階級の女性と、文明化されていない労働者階級としての「写真花嫁」とを区分する、階級ラインが確立したことを示唆している。力行女学校も、労働者階級の在米日本人移民の配偶者として、規格化された「写真花嫁」の養成を行っていたと言える。即ち、日本人キリスト教団体の、渡米日本人女性のジェンダー規範の構築は、近代的で西洋化された、独立した女性としての日本人女性のイメージをアメリカ社会に表明する一方で、慎ましく、従順な、日本人生産者の妻として単一化された集団を、在米日本人コミュニティ内に創り上げるという、二面性を内包した試みであったと、まとめられるのである。

注

- (1) Yuji Ichioka, *The Issei: the World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924* (New York: Free Press, 1988), 146-75. 桑井輝子『外国人を

- めぐる社会史』(雄山閣, 1995年), 157-167頁。増淵留美子「1910年代の排日と「写真結婚」」, 戸上宗賢編『ジャパニーズ・アメリカン』(ミネルバ書房, 1986年), 296-298頁。
- (2) 前掲, 増淵留美子「1910年代の排日と「写真結婚」」。前掲, Yuji Ichioka, *The Issei*, Chapter V. また, Alice Yun Chai, "Picture Brides: Feminist Analysis of Life Histories of Hawai'i's Early Immigrant Women from Japan, Okinawa, and Korea," Donna Gabaccia, ed., *Seeking Common Ground: Multidisciplinary Studies of Immigrant Women in the United States* (Westport, Conn.: Praeger, 1992)。
- (3) Susan McCoin Kataoka, "Issei Women: A Study in Subordinate Status," (Ph. D. diss., University of California, 1977). Eileen Sunada Sarasohn, *Issei Women: Echoes from Another Frontier* (Palo Alto: Pacific Books, 1998). また, カナダの「写真花嫁」を扱ったものとして, 真壁知子『写真婚の妻たち——カナダ移民の女性史』(未来社, 1983年); 工藤美代子『写婚妻』(ドメス出版, 1983年)がある。
- (4) 安武留美「北カリフォルニア日本人移民社会の日米教会婦人たち——日系一世女性のイメージを再考する——」, 『キリスト教社会問題研究』49 (2000)。
- (5) Brian Masaru Hayashi, *'For the Sake of Our Japanese Brethren': Assimilation, Nationalism, and Protestantism among the Japanese of Los Angeles, 1895-1924* (Stanford: Stanford University Press, 1995), Chapter 6. また, 日本人キリスト教会が在米日本人のエスニシティ形成に果たした役割についての近年の研究としては, 例えば, 同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』(PMC, 1991); 阪田安雄, 山本剛郎, 飯田耕二郎, 新井勝紘, 吉田亮編, 『福音会沿革資料』(現代史料出版, 1997); Ryo Yoshida, "A Socio-Historical Study of Racial/Ethnic Identity in the Inculturated Religious Expression of Japanese Christianity in San Francisco 1877-1924" (Berkeley: Ph. D. diss., University of California, 1989); 吉田亮『アメリカ日本人移民とキリスト教会社会——カリフォルニア日本人移民の排斥, 同化と E. A. ストージ』(日本図書センター, 1995)を参照。
- (6) 吉田亮「カリフォルニアの日本人とキリスト教」, 『北米日本人キリスト教運動史』, 171-72頁。前掲, 安武留美「北カリフォルニア日本人移民社会の日米教会婦人たち」, 59頁。
- (7) 前掲, 安武留美「北カリフォルニア日本人移民社会の日米教会婦人たち」, 56-58頁。また, アメリカ人女性教会団体の中国人売春婦救出活動については, Peggy Pascoe, *Relations of Rescue: the Search for Female Moral Authority in the American West, 1874-1939* (Oxford: Oxford University Press, 1990)を参照。
- (8) 前掲, Yuji Ichioka, *The Issei*, p. 39.

- (9) 前掲, 吉田亮「カリフォルニアの日本人とキリスト教」, 182-183頁。
- (10) 『新世界』1920年7月24日, 8月10日。『日米新聞』1920年7月23日。
- (11) 『女子青年会』1912年10月, 1915年11月, 1916年10月。
- (12) 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』(警醒社, 1911)。
- (13) 『新世界』1917年6月17日。
- (14) 在米日本人会編『在米日本人史』(在米日本人会, 1940), 400頁。
- (15) 坂田満宏「排日問題と太平洋沿岸日本人キリスト教団」, 『北米日本人キリスト教運動史』, 241-242頁。
- (16) 前掲, 在米日本人会編『在米日本人史』, 400-402頁。桑港基督教女子青年会「回顧二十年」(桑港基督教女子青年会, 1932), 2-3頁。安孫子余奈子「在米日本人基督教女子青年会創立の次第」, 『女子青年会』1912年10月, 101頁。「在米日本人女子青年会の状況」, 『女子青年会』1913年7月, 41-42頁。桑港YWCAの運営資金調達に関しては, 安孫子久太郎夫人であり津田梅子の妹である安孫子余奈子の人脈によるところが大きい。活動開始早々に資金不足に陥った際, 安孫子余奈子は, 1913年に日本に帰国した折, 各界の有力者に事情を訴え, また, 新渡戸稲造の斡旋も手伝って, 渋沢栄一郎伯爵, 森村男爵, 浅野総一郎, 大倉孫兵衛, 添田寿一らより1600円の寄付金を得るに至り, 窮を脱した。
- (17) 前掲, 在米日本人会編『在米日本人史』, 401-402頁。前掲, 桑港日本人基督教女子青年会「回顧二十年」, 3-6頁。
- (18) 『女子青年会』1914年12月, 651頁。
- (19) 『日米新聞』1916年7月20日。『新世界』1916年8月18日。
- (20) 『女子青年会』1915年11月, 573-574頁。
- (21) 前掲, 在米日本人会編『在米日本人史』, 401-402頁。前掲, 桑港基督教女子青年会「回顧二十年」, 2-3頁。
- (22) 前掲, 安孫子余奈子「在米日本人基督教女子青年会創立の次第」, 102頁。
- (23) 例えば, 楠本六一「米国加州沿岸の同胞」, 『女子青年会』1914年7月, 378頁, 「誤解の起こる点」, 『女子青年会』1915年1月, 189-192頁を参照。楠本はロスアンゼルス日本人人道会幹事。
- (24) 『女子青年会』1913年10月, 642-643頁。
- (25) 横浜基督教女子青年会「渡航婦人講習所概覧」(横浜基督教女子青年会, 1916), 1頁。前掲, 『女子青年会』652-653頁。
- (26) 「河井総幹事」, 『女子青年会』1915年6月, 295-299頁。「河井総幹事来信」, 『女子青年会』1915年9月, 441-445頁。河井道子「帰朝の挨拶」, 『女子青年会』1916年10月, 482-85頁。
- (27) 河井道子「渡米婦人は成功しつつありや」, 『女子青年会』1916年11月, 548-553頁, 1916年12月, 611-615頁, 1917年1月, 15-19頁, 1917年3月, 77-80頁, 1917年4月, 141-144頁。「天使島の日」, 『女子青年会』1915年9月, 437-441頁。

- ㉘ 前掲、『女子青年会』1916年11月，551頁。
- ㉙ 前掲、『女子青年会』1916年12月，612，614頁。
- ㉚ 前掲，横浜基督教女子青年会『渡航婦人講習所概覧』，2-7 頁。「横浜移民部の働の一部」，『女子青年会』1919年 1 月，110頁。
- ㉛ 前掲、『女子青年会』513-514頁。
- ㉜ 横浜基督教女子青年会『渡米婦人心得』（横浜基督教女子青年会，1915）。
- ㉝ 河井道子「渡米者の栞」，『女子青年』1917年 7 月，279-283頁，1917年 8 月，355-357頁，1917年 9 月，436-439頁，1917年10月，515-517頁，1917年11月，565-568頁。
- ㉞ 前掲，河井道子「渡米者の栞」，『女子青年会』1917年 7 月，280頁。
- ㉟ 前掲，河井道子「渡米者の栞」，『女子青年会』1917年 8 月，356頁。
- ㊱ 前掲，横浜基督教女子青年会『渡米婦人心得』。
- ㊲ 前掲，河井道子「渡米者の栞」，『女子青年会』1917年 9 月，438頁。
- ㊳ 前掲，河井道子「渡米者の栞」，『女子青年』1917年10月。
- ㊴ 前掲，河井道子「天使島の一日」，438頁。
- ㊵ 前掲，河井道子「天使島の一日」，439頁。
- ㊶ 前掲，河井道子「天使島の一日」，439頁。また、『日米新聞』1917年 9 月31日，10月 1， 2， 3， 4， 5日，『新世界』1920年 5 月 3， 4， 5， 6， 7， 8， 9， 10 日でも，エンゼル島に上陸した「写真花嫁」の様子が書かれている。
- ㊷ 前掲，河井道子「渡米者の栞」，『女子青年会』1917年11月，567頁。
- ㊸ 高梨孝子「写真結婚の話」，『女子青年会』1919年 4 月，219頁。
- ㊹ 前掲，高梨孝子「写真結婚の話」，219頁。
- ㊺ 前掲，高梨孝子「写真結婚の話」，220頁。
- ㊻ 力行会の渡米移民事業については，永田編『力行会七十年物語』（永田，1966），奥村直彦「島貫兵太夫の「力行教育」思想 ― その形成過程と移民事業への展開」，同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』，Mitziko Sawada, *Tokyo Life, New York Dreams: Urban Japanese Visions of America, 1890-1924* (Berkeley: University of California Press, 1996), Chapter 6 を参照。
- ㊼ 前掲，永田編『力行会七十年物語』，18-19頁。前掲，奥村直彦「島貫兵太夫の「力行教育」思想」，503-508頁。前掲，Sawada, *Tokyo Life, New York Dreams*, 120-21.
- ㊽ 前掲，奥村直彦「島貫兵太夫の「力行教育」思想」，537-538頁。前掲，Sawada, *Tokyo Life, New York Dreams*, Chapter 5.
- ㊾ 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』（警醒社，1911），130頁。
- ㊿ 前掲，永田編『力行会七十年物語』，27-28頁。前掲，奥村直彦「島貫兵太夫の「力行教育」思想」，508頁。『新世界』1909年 1 月 8 日。
- ㊽1 前掲，島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』，137-139頁。渡米した力行会員から力行

会の機関紙に寄せられる通信にも、日本人婦人の移民の必要性が説かれている。例えば、『渡米新報』1907年7月、57頁、1907年8月、14-15頁を参照。

- (52) 前掲、島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、140-141頁。
- (53) 前掲、島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、附録、30-31頁。
- (54) 前掲、島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、附録、30-31頁。
- (55) 下川歌史編『明治・大正家庭史年表 1868→1925』（河出書房、2000）326、332頁。
- (56) 前掲、島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、31頁。
- (57) 前掲、Hayashi, 'For the Sake of Our Japanese Brethren', 21-24.
- (58) 前掲、島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、147-148頁。
- (59) 前掲、島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、145-147頁。
- (60) 前掲、島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、145頁。
- (61) 『新世界』1914年6月30日、2頁。
- (62) 『日米新聞』1916年10月3日、8項。
- (63) 前掲、『新世界』、2頁。
- (64) 前掲、Sarasohn, *Issei Women*, 70.
- (65) 『新世界』1915年5月11日、16日。島貫しか子「千人の家族を拵えたい」、『真新婦人』1915年12月、10-12頁。
- (66) 前掲、『新世界』1915年5月16日。
- (67) 『新世界』1915年9月24日。
- (68) 前掲、島貫しか子「千人の家族を拵えたい」、11頁。
- (69) 国立資料センター、サンプルノ支部所蔵の膨大な入国移民ファイルから、「写真花嫁」の出身地や社会的出自を知ることが出来る。筆者は、1907年から1919年までの奇数年に入国した「写真花嫁」の中から120人に限定して検索したが、管見の限りでは、確かに九州、中国地方の農業従事者の家庭出身の女性が大多数を占めていた。それ以外では、関西、関東、東北地方出身者や、裁縫婦、教員、学生、家庭の手伝いをしていた女性たちもあった。入国移民ファイルが示す情報は、あくまで大まかな社会的背景の分類の枠を出ないものであり、そのため、それだけでは、「花嫁」の個人個人の、詳細な社会的環境や経済的事情に迫ることは出来ない。また、本論文が、女性たちの出自や背景の多様性という側面に重点を置いていることから、あえてオーラル・ヒストリーに準拠したことを断っておきたい。
- (70) 前掲、Sarasohn, *Issei Women*, 21, 32, 33, 39, 51, 59.
- (71) 前掲、Sarasohn, *Issei Women*, 88.
- (72) 前掲、Sarasohn, *Issei Women*, 30, 32.
- (73) 前掲、Sarasohn, *Issei Women*, 40, 60. 河井道子「婦朝の挨拶」、『女子青年会』1916年10月、485頁。
- (74) 近代日本における女子教育と良妻賢母思想の普及については、例えば、秋枝蕭子

- 「良妻賢母主義教育」の逸脱と回収 ― 大正・昭和前期を中心に」, 奥田暁子編『女と男の時空 ― 日本女性史再考』10 (藤原書店, 2000), 451-480頁, 牟田和恵『戦略としての家族 ― 近代日本の国民国家形成と女性』(新曜社, 1997) 参照。
- (75) 前掲, 秋枝蕭子「良妻賢母主義教育」の逸脱と回収 ― 大正・昭和前期を中心に」, 477頁。
- (76) 前掲, Sarasohn, *Issei Women*, 43.
- (77) 前掲, Kataoka, "Issei Women: A Study in Subordinate Status," 170. また, 『日米新聞』1917年5月6日にも, アメリカは女性を尊ぶ国であるとの評判が, 中流を中心とした日本人女性の間に渡米熱を高揚させている一因であると記されている。
- (78) 例えば, 『新世界』1912年6月28日, 5頁, 1913年3月8日, 3頁, 『日米新聞』1914年6月2, 3; 4, 5日, 7頁, 1917年3月6, 7, 8, 9, 10日参照。
- (79) 前掲, Kataoka, "Issei Women: A Study in Subordinate Status," 175.
- (80) 前掲, Sarasohn, *Issei Women*, 65.
- (81) 前掲, Kataoka, "Issei Women: A Study in Subordinate Status," 170, 172.